

図書館だより

No. 10
平成 29 年 2 月 24 日

雨水(雪が雨に変わり、氷が融けて水になる頃)を過ぎ、カレンダーももうすぐで3月となります。これからは少しずつ暖かさを感じられる時が増えていくことでしょう。桜にはまだ早いですが、梅は見ごろを迎えます。梅も風情があってよいものです。今年は梅を愛でながら、春の訪れを待ちわびてみませんか。新宿駅から徒歩10分で行ける新宿御苑には、フランス式整形庭園、イギリス風景式庭園と日本庭園を巧みに組み合わせた庭園が広がります。園内には梅林もあり、約300本の紅白の梅が楽しめます。都内に出かけた際に、ぶらり立ち寄ってみてはいかがでしょうか。

ぶらりと言えば、最近図書館では『ブラタモリ』(NHK「ブラタモリ」制作班 || 著)シリーズが入りました。地質に着目し、日本各地を歩くタモリさんの博識ぶりが素晴らしいです。都市の成り立ちが地形からわかるおもしろさが、ブラタモリの醍醐味です。みなさんも暖かくなってきたこの季節にぶらり歩きでその楽しさを知ってみてはいかがでしょうか。

*梅の花を知る

479-オ『ウメハンドブック』 大坪 孝之 || 著 亀田 龍吉 || 写真 文一総合出版

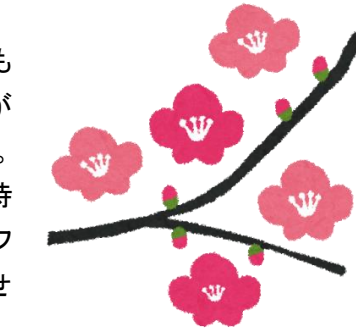
桜よりも先に春の訪れを感じさせてくれる梅の花。その種類は世界では1000種を超え、日本では約600種の梅があるのだそうです。この本では庭木や梅園に植えられている代表的な品種120種が掲載されています。見た目と特徴が写真つきでシンプルにまとめられているので初心者にもわかりやすいです。

ひとえに梅と言っても、ひとつひとつの種類を見てみると、色や形が様々であり、そこに個性を見つけることができます。また、「通い小町」、「緋の司」、「蝶の羽重」など、それぞれにつけられた名前の響きも梅の美しさを引き立てています。名前も併せて、楽しんでみてください。

*街歩きの楽しさ

291-ニ-1『ブラタモリ』 NHK「ブラタモリ」制作班 || 著 角川書店

主要な観光地を歩くのではなく、「地形」に注目して、その地を歩いていくのがブラタモリ。第1巻では、長崎・金沢・鎌倉を訪れています。長崎では坂の多い町並みにダンサー(段差)の血が騒ぎ、金沢では「石垣」から歴代藩主の美意識を感じ、鎌倉では800年の「まちづくり」の痕跡を探して、タモリさんが歩きます。何度も観光で訪れたことのある場所もブラタモリで読むと、今までと異なった視点で町を知ることができ、町の端々に何百年も昔の面影を見つけながら歩く楽しさに出会えます。土地が重ねてきた歴史を感じながらタモリさんと日本全国を旅してみませんか。



贈る言葉に代えて

もうあと1週間で卒業式。少しまだ早いですが、3年生のみなさん、卒業おめでとございます。きっとみなさんそれぞれがこの3年間で濃く過ごしてきたことだと思います。何もかもが新鮮だった1年生の頃と、今の自分を比べてみて、自分の成長をいくつ感じられるでしょうか。ここからまたみなさんの世界は一段と広がっていきます。日々を大切に、さらに素敵な女性へと成長していきましょう。

それでは最後にみなさんへ贈る言葉に代えて、この三冊を紹介いたします。

596.6-ム『新版 大学生のためのレポート・論文術』 小笠原 喜康 || 著 講談社

新たな旅立ち、そこには様々な壁がやってきます。進学するあなたたちにとって最初の壁、それは「レポート」です。大学に入ってまず湧いてくる「レポートってどうやって書いたらいいの?」という疑問。それがこの1冊ですべて解決できます! レポートの書き方から情報の調べ方、さらには卒業論文執筆時まで使える大学生必携の1冊です。最近、インターネットの中から文章をコピーして課題を提出し、問題になっています。なぜこのようなことが起こるかという、きちんとレポートの書き方を知らないからです。これを読んで正しいレポートの書き方を身につけ、充実した大学生活を送ってほしいと思います。

★鈴木信晃先生からご紹介いただきました★

366-コ『心に火を。』 心に火をつける物語編集委員会 || 編 廣済堂出版

電車の運転士、作家、会社社長、受付、書店員など、様々な職業に就く人たちの仕事に対する思いが載っています。どんな仕事にも辛いことはあります。華やかに見えても、楽しそうに見えても、その姿の裏に悩みや苦勞を背負っているのです。それを乗り越え、自分の中で見つけた「その仕事を好きな理由」を胸に抱いて、今日も持ち場に立ち、みんな働いています。働く上で悩みはいつだって尽きません。だけど、それは自分だけではありません。誰もが壁にぶつかりながらも働いているんだということが伝わってきます。そのメッセージはこの先、社会に出て働くみなさんがくじけそうになった時、「心に火」をつけてくれるきっかけとなってくれることでしょう。

913.6-ス『また同じ夢を見ていた』 住野 よる || 著 双葉社

小学生の「私」はちょっと生意気で、でもまっすぐに物事を見つめられる女の子。口癖は「人生とは」で、「人生って虫歯と一緒に」「嫌なら早めにやっつけなきゃ」、「人生とはヤギさんみたいなものね」「素敵な本を読むと思うの。私、この本を食べて生きていけるかもって」など、人生を自分の感じたまま色々なものに例えている。クラスには今のところ友だちがいないけど、放課後に会いにくる素敵な友だちはたくさんいる。私よりずいぶん年上だけど、みんなが私に大切なことを教えてくれる。すれ違ってばかりのクラスメイトや喧嘩してしまった家族との仲直りの仕方、国語の授業で出された「幸せとは何か」の答えを探すためのヒント、素敵な友だちと過ごす時間の中で私の心は一步一步成長していく。

🇯🇵 ニッポン再発見 🇯🇵

ニッポン再発見、第9回は北部九州（福岡・佐賀・長崎・熊本・大分）の5県です。日本三大祇園祭「博多祇園山笠」や日本三大火祭「大善寺玉垂宮の鬼夜」、「博多どんたく」など伝統の祭りが多く行なわれている福岡県。アジア最大級の規模を誇る熱気球の競技大会「佐賀インターナショナルバルーンフェスタ」が行われている佐賀県。異国情緒を感じられる街並みと世界新三大夜景に選ばれた夜景が美しい長崎県。その名を国内外にとどろかす「くまモン」が営業部長を務め、阿蘇の豊かな自然と熊本城が人気の熊本県。別府温泉や湯布院温泉をはじめ、日本一の源泉数と湧出量を誇る「おんせん県」大分県。九州地方も訪れてみたい魅力がたくさんです。

本校の修学旅行でも以前は福岡・熊本・長崎を訪れていました。長年いらっしゃる先生に聞けば、九州の魅力を教えてもらえるかも！



*唐津焼に魅せられる

708-ニ 3-2 『唐津焼』 NHK「美の壺」制作班 || 編著 日本出版放送協会

九州・肥前（今の佐賀・長崎）で誕生した「唐津焼」400年余りの歴史を受け継いできたこの唐津焼は、伊万里磁器のさきがけとなり、日本のやきものの歴史を大きく変えた火と土の芸術と言われています。素朴な見た目ながら、そこにはいくつもの奥深い味わいが秘められており、今も昔も万人の心を惹きつけてきました。

他の陶器にはない「土味」、「主張しない」主張で乗せられた主役を引き立てる絵と色調、時間を重ねて自分の手になじませていく楽しみなど、眺めてもよし、使ってもよしの唐津焼の魅力が存分に伝わってくる本です。陶器に興味を持たない人が読んで、十分おもしろく、実際に唐津焼を見て、触れて、その魅力を感じてみたいと思えてきます。

*巡りくる季節ごとに、出会いたい奇跡

748-カ 『ASOKUJU 阿蘇くじゅう 朝の光へドライブ』 川上信也 || 著 花乱社

熊本・大分県に広がる阿蘇くじゅう国立公園は、大カルデラにそびえる阿蘇山、その北のくじゅう連山などの火山群、そしてその周囲に広がる雄大ななだらかな草原を有します。この写真集が撮影された三年間に、ここでは大規模な噴火が2度、そして甚大な被害をもたらした熊本地震にも見舞われました。しかし自然の厳しさとはうらはらに、早朝の高原風景は静寂に包まれ、ただただ美しいのです。夜明け前の星のきらめき、霧のむこうに昇る太陽、なだらかにどこまでも続く道、こちらを見つめる野生動物、木漏れ日を受けて煌めく幻想的な滝、露を置き光る湿地帯の植物、風に揺れるススキの波、一面の紅葉、薄化粧した地に立つ木々、凜と咲く花。見ていると、澄み渡った空気まで感じられるような気がします。九州に残された厳しくも美しい自然に感謝。

*神の沈黙とは

B913.6-1 『沈黙』 遠藤 周作 || 著 新潮社

今年1月、「沈黙 -サイレンス-」が公開されました。それに伴い、原作の「沈黙」も再注目されています。江戸時代、日本ではキリスト教が禁止され、信徒が激しい弾圧を受けていました。その日本へ潜伏布教を行うために海を渡り、潜入したポルトガル司祭のロドリゴ。彼は密かに信仰を続ける信徒たちと共に身を隠しながら、布教を行いました。しかし、間もなくロドリゴは囚われの身となります。信徒たちに降りかかる残忍な拷問を目の当たりにし、彼の心は大きく揺れます。仲間や信徒の殉死、教父の棄教、重なる悲劇と止まない祈りを前になお主であるキリストは沈黙を守っている、その意味するものは何なのか、苦悩するロドリゴが辿り着いた答えには深く考えさせられます。

歴史小説ではありますが、史実に基づいた内容から当時の情景が鮮明に浮かんでくる本です。

図書館司書の「今月はこの本を読みました」

湊かなえさんの『リバーズ』が4月からドラマになると知りました。『リバーズ』は既に読んでいて、結末に「うわあー」と衝撃を受けたのですが、他も読んでみたくなり、『ユートピア』(913.6-ミ 湊かなえ 集英社)を手に取りました。舞台となるのは鼻崎町という港町。鼻崎町で生まれ育った菜々子にとっては、さびれた町。夫の転勤によって暮らすことになった光稀にとっては、地元民と自分とに距離をおく町。陶芸をするため越してきたすみれにとっては、最高のロケーションを持った町。大人の女性三人の視点で物語は進んでいきます。それぞれの葛藤や苛立ちには共感できる場所があり、「そういう気持ちってあるよね」なんて思いながら読んでいくのですが、昔、この町で起こった事件を発端としたさらなる事件が起こります。そこには幼い頃の事故で車イス生活を送っている菜々子の娘 久美香と、久美香を妹のように可愛がる光稀の娘 彩也子も巻き込まれるのですが、いやー、大人以上に子どもはよく見ているし、考えている！そして、今回も読者に向かって「今回はそうきたか！」という結末が放たれます。【今井】

このごろ健康のありがたみをますます感じるようになりました。身体を整えるにはやはり適度な運動と食生活ということになるのでしょうか。ずうっと実家暮らしなので、自分で自分の食生活をマネジメントする意識はどうしても低く、ついその場その場で食べやすいものに手が伸びてしまいがちです。食事を準備する時間が待てずに食べてしまうおやつや、そもそもちゃんとしたものを食べるのが面倒なのでジャンクなもので済ましてしまうのをなんとかできないかと考えていた時、目についたのが『つくおき 週末まとめて作り置きレシピ』(596-ノ nozomi 光文社)でした。時間のある時にお惣菜をまとめて作って置くという、目新しくはないけれども 眼からうろこが落ちるような提案でした。お惣菜を3品作る手間は、1品を3回作るより断然楽なのです。この本にはタイムスケジュールも載っていて、慣れれば14品を150分で作れるそうです。すぐに食べられるお惣菜なら、お野菜を食べるのも面倒に感じません。あとは、適度な運動問題 …だけです。【鈴木】

